

なぜ どのように 複言語主義を 日本で実践するのか

2018.2.1
木村護郎クリストフ

話の流れ

1. 「現地語」を学ぶ意味(なぜ)
2. 複言語主義と言語分業社会(どのように)
3. 言語教育のパラダイム転換に向けて(実践)
4. まとめ

なぜ？

1. 「現地語」を学ぶ意味

～極例としてのソルブ語体験から～

現地理解の手段としての言語

- ドイツ語: 意思疎通や情報収集はドイツ語でも可能。
ただし「外側から/外向きの視点」(共通語バイアス)
- ソルブ語: 「内側からの視点」

「わかったつもり」になる危険

- (共通語・国際語で)ことばが通じる ≠ 相互理解
- 内側からの視点を知る必要性

言語によって異なる情報

Yahoo! Yahoo! Japan Yahoo! Deutschland
の比較

- その言語圏に関する情報はその言語版がいちばんくわしい
- 各言語版はその言語圏に応じた(国際)情報の取捨選択をしている

「同じ地球とは思えない」 2018.1 日英独一つも共通なし

Wikipedia なども同様！

(英語が必ずしも一番充実しているわけではない)

多言語学習の意義

①新しい視点の獲得へ

世界を理解するための異なる視点を得る

②新しい関係性の構築へ

国・地域・人とのつながりや愛着が生じる

いまなぜ多言語か
→世界は多様だから！

一方のグローバリズム(英語のみ)と
他方の自国第一主義(日本語のみ)に
引き裂かれるかのような世界において、
その二元論をのりこえるために、
多言語学習・教育の意味はかつてなく大きい。

効率性の落とし穴

- 一見、外国語教育を、圧倒的に世界に普及している英語に集中することが経済的、効率的に思われる。
- しかし英語という、英米圏を基盤とする単一の共通語にのみ頼ることには、
 - ①情報収集や見解の偏り(「視点」)、
 - ②世界各地域との長期的な相互理解や関係の深化の限界(「関係性」)などの限界がある。

#国際関係上の大きな不安

例: 安保法制議論

どのように？

2. 複言語主義と言語分業社会

EUの異言語教育に関する提言

- A Rewarding Challenge how the Multiplicity of Languages Could Strengthen Europe
(Proposals from the Group of Intellectuals for Intercultural Dialogue set up at the initiative of the European Commission, 2007)

EUの異言語教育に関する提言

- EU諸国民の二者間関係においては第三者言語よりも双方の言語に重点をおくべきである。経済、政治、文化各方面で二国間関係をまかなう人材が必要。
- 母語および国際語とは別に、自分にとっての「養子言語」をもとう。
(personal adoptive language = PAL)

「養子言語」について

The EU should promote the concept of a “personal adoptive language”, to be seen as a “second mother tongue” with every European citizen being motivated to learn one. It would need to be part and parcel of everyone's school education/university studies and professional life, closely linked to aspects involving history, culture and literature. This adopted language would not normally be the one used for international communication.

http://europa.eu/rapid/press-release_IP-08-129_en.htm

個人にとって: 複言語主義

自分にとっての「養子言語」
(personal adoptive language)

国際文化フォーラムの取り組み:
「りんごをかじろう」
「自分の中にりんごを实らせよう」
<http://tjf.or.jp/ringokinenbi/sp/about/>

社会にとって: 言語分業社会

- 共通語の否定ではなく、その限界を補う

例: 日本語で読む中東メディア
<http://www.el.tufs.ac.jp/tufsmmedia/common/prmeis/fs/index.html>

→ 東アジア、東南アジアも
<http://www.el.tufs.ac.jp/tufsmmedia/>

「異なる意見集め磨く信頼性」

平川 秀幸 (朝日新聞20110630オピニオン)

東日本大震災とそれに伴う福島第一原発の事故は、日本社会の多くのものを揺さぶっている。(…)知識・情報が不確定で政治的バイアスも疑われる状況では

「**知のポートフォリオ**」[多角的な情報の蓄積]という発想が重要だ。(…)その際重要なのは、どの知識・情報も多かれ少なかれ不確実性やバイアス的信頼を含み、誤っている可能性(リスク)があるということだ。これを大前提にしたうえで比較的信頼できる知識・情報を多く集め、複数の可能性を考慮して誤りのリスクをヘッジ(低減)し、正しさの相場観を形成するのである。(…)

社会全体で知のポートフォリオを豊かにすることは、今の危機には間にあわずとも、今後の原子エネルギー政策を考えるうえでますます重要になるに違いない。

外国語による情報もその一つ

フランスの学校でドイツ語の雑誌に載った原発関係の記事を読んでいるフランスとは異なる論調に接していることを紹介したあと、

「母語で得られる情報だけに頼るのは危険だ。外国語を学ぶ理由の一つはそこにあると思う。もし第二次世界大戦中に多くの日本人がアメリカの新聞と日本の新聞を読み比べていたら、戦争はもっと早く終わっていたのではないか。それはアメリカの新聞に書かれていることが正しいという意味ではない。書かれていることがあまりにも違うというだけで、自分の頭で考えるしかない。何でも疑ってかかれ、という意識が生まれてくる。そのことが大切なのだと思う。」

多和田葉子『言葉と歩く日記』岩波新書2013,214ページ

実践例

3. 言語教育のパラダイム転換に向けて

グローバル化・国際化への異なる対応

- 英語＝ネイティブ
- 英語圏＝世界
- 全て英語の教育課程
- 多様な英語
- 世界＝多言語
- 日本語も重視(母語、統合の言語として)

「節英」とは何か

- 「オール英語」(English Only)でいいのか。

節英 ≠ 反英語

#節電 ≠ 反電気

「英語だけで世界中と分かりあおうとすることは、まったく英語なしで国際的な伝え合いをしようと思うのと同じくらい、無謀」

(『節英のすすめ』267-268頁)

- 節英＝「自分の英語(言語)使用がどのような影響を及ぼすかに思いをはせ、節度をもって大切につかおうとする姿勢」
- 英語をひたすら制限するという発想ではなく、代替できるところでは別の方法で補うことを考えるということ

⇒21世紀の教育の基本課題としての
「能力制御」、「節制」の一環

他の方策を探る

- ①多言語学習・使用 (⇔英語だけの外国語教育)
- ②共生言語としての日本語 (⇔日本人の日本語)

4. おわりに

1. 多言語学習の意義 — 個人にとって
→複言語主義:養子言語、りんご
2. 多言語教育の意義 — 社会にとって
→言語分業社会:多極化する世界への対応
3. 言語教育のパラダイム転換に向けて
→節英:英語・日本語・自分の隣語(養子言語)を
自覚的に使いこなす学習者・使用者になろう!

参考文献

- 庵功雄(2016)『やさしい日本語 — 多文化共生社会へ』岩波新書
- 木村護郎クリストフ(2016)『節英のすすめ — 脱英語依存こそ国際化・グローバル化対応のカギ!』萬書房
- 木村護郎クリストフ(近刊)「言語が異なる人と何語でどのように話すのか—お互いの言語を使う意義と方法について」泉水浩隆編『ヨーロッパ言語共通参照枠の現状と今後 —初習外国語を中心に—』(共同研究成果報告書)南山大学地域研究センター
- 木村護郎クリストフ・渡辺克義(共編)(2009)『媒介言語論を学ぶ人のために』世界思想社
- 木村護郎クリストフ・泉邦寿・市之瀬敦・リサ フェアブラザー・シモン テュシェ(2013)「比較媒介言語論序説」『Sophia Linguistica』第60号
- 平高史也・木村護郎クリストフ編著(2017)『多言語主義社会に向けて』くろしお出版